

ダニエル、ペルシャとギリシャ

2012年3月3日

アシェル・イントレーター

預言者ダニエルは歴史の流れを変えた霊的な戦争に従事していました。21日間の祈りと断食の後、主の御使いが彼に現われて言いました。

ダニエル 10章 12～14節「彼は私に言った。「恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。ペルシャの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれたので、…終わりの日にあなたの民に起こることを悟らせるために来たのだ。なお、その日についての幻があるのだが。」

その霊的な戦争の過程は、ダニエルが自分を謙虚にして、聖書を学び、イスラエルと終わりの時代に対する神様の計画を見つけた時に始まりました。この謙虚さ、聖書の学び、神様のイスラエルと終わりの時代に対する計画という組合せは、私たちの時代における霊的な戦争に備える土台でもあるのです。

天において良い天使と悪い天使が格闘を繰り広げています。ここでは、主の御使いと、イスラエルを守る事がその任務である御使いのかしらミカエルが、2人の悪い天使のかしらに対して戦っています。一人はペルシャの君と呼ばれ、もう一人はギリシャの君と呼ばれているのです。

ダニエル 10章 20節

「ペルシャの君と戦うために帰って行く。私が出かけると、見よ、ギリシャの君がやって来る。」

今ここに預言者ダニエルはいませんが、私たちは祈りと断食と霊的戦闘をもって彼の役割を担っています。私たちは自分自身を低くし、聖書を学び、終わりの時を理解し、神様のイスラエルに対する計画について理解していなければなりません。ダニエルが祈り始めた瞬間から御使いたちは行動を開始しましたが、私たちは現状打破できるよう、執り成しの祈りを続けていく必要があります。これと同じパターンが私たちにも当てはまります。すなわち祈りが御使いを動かし、世界を変えてゆくのです。しかし忍耐が必要です。

どの国にも良い天使と悪い天使がいます。良い天使とは信仰にある義なる残された者たちに繋がり、悪い天使とはその国のこの世的な権力に繋がっています。私は、今日のイスラエルに回復された信仰にある残された者たちがいるため、イスラエルを守る御使いミカエルには新たな重要性が与えられていると信じています。

ではペルシャやギリシャと呼ばれる悪の天使のかしらとは誰なのでしょう。私の認識では、ペルシャの悪い天使は、今日の世界におけるイスラム過激派を率いている悪霊の君で、面白いことに現代のペルシャであるイランのアーヤトッラー（訳注：イスラム教シーア派の上級法学者）たちによる体制の中に、この霊の地理的中心の一つがあります。ギリシャの君は欧米的な無神論人道主義を表わしていると思われ、その権力中心の一つは国連にあります。これらイスラム過激派と国連の2つの力が、イスラエルを罪に定めることに焦点を合わせていることは単なる偶然ではないのです。

私たちはダニエルが直面したのと同じ霊的戦いに立ち向かっているのです。事実主の御使いは、この戦いの完成は終わりの時に達成されると明確に語っているのです。ダニエルはもういませんが、ミカエル、ペルシャの君、ギリシャの君、そして良い天使も悪い天使も含む全ての天使はまだここにいます。その同じ戦いがあるのです。

イスラエルの「アパルトヘイト」、プリムの祭り、イラン アリエル・ブルーメンソール

今週は、北米での第8回目の年次「イスラエルのアパルトヘイト週間」です。抗議者たちはこのユダヤ人国家に対する一連のボイコットや制裁行動を繰り広げています。「アパルトヘイト」とは、1948年から1994年にかけて南アフリカの黒人住民に対し白人少数派により課せられた、法的に有効で制度化された人種隔離政策です。イスラエルの名誉をおとしめ、また非合法化する為、自由主義を掲げる欧米の左派勢力とイスラム世界のイスラエルに敵対する両陣営は、このショッキングな用語をよりいっそう頻繁に選んで用いているのです。

私はエルサレムに住むユダヤ系イスラエル人ですが、毎日イスラエル国民であるアラブ人にも「パレスチナ人」にも会います。彼らはスーパーで頭を覆った女性、近くの市場のアラブ人の屋台、国営化された保健診療所の歯医者さん、私のクルマをみてる修理工さん、等です。イスラエル国会には2つのアラブ政党があり、最高裁判所裁判官の一人はアラブ人で、そして全ての政府文書はアラビア語で入手することができます。

もし私たちが本当に、制度化された差別を目論んでいるとするならば、私たちは全く劣悪な仕事をしていると言えるでしょう。

反ユダヤ思想は、その特徴として理性的な議論を拒否する奇妙な憎悪を孕んでいます。この来たる週は世界中のユダヤ人とクリスチャンの友人たちが、エステル記にある最後のひと時で事象の大どんでん返しが起こった、プリムの祭りを祝います。この聖書の中のほんの小さな文書は、後に起こる反ユダヤ思想と神様の最終的なユダヤ人の開放についての一種の雛形なのです。

ハマンがアハシュエロス王に進言した、ペルシャ帝国全土のユダヤ人が殺されるべきである理由は、「あなたの王国のすべての州にいる諸民族の間に、散らされて離れ離れになっている一つの民族

がいます。彼らの法令は、どの民族のものとも違って」(エステル3章8節)

ペルシャ帝国は巨大でした、インドからエチオピアに渡る127の州からなっていました。(エステル8章9節)ユダヤ人をそのような民族的、文化的、宗教的多様性を誇る帝国の中から選別して、彼らが異なっていると指摘するだけで、迫害する為にはちょっとした悪魔の手助けが必要だったのです。

ハマンからヒトラー、そしてアフマディネジャドまで、真理の小さな粒は、民族虐殺や、反ユダヤの思想へと形成されていったのです。もちろんユダヤ人は異なります、がしかし、日本人も、アメリカ人も、フランス人も、ブラジル人も皆お互いに異なっているのです。

このプリムの祭りと同じ週に、イスラエルの大統領と首相の両方がワシントンを訪れ、オバマ大統領および米政府高官たちとイランの状況について戦略的な協議を行ないます。

エステル断食

イスラエルの祈りのチームと世界中のメシアニックジューとクリスチャンと一緒に捧げる、タアニット・エステル＝エステル断食にどうぞご参加ください。私たちは3月7日水曜日朝6時から夜6時まで(日本時間:同日午後1時から翌8日午前1時まで)祈りと断食のため集まります。

この祈りの日へのご参加をお考えの方(一人でもグループでも、全日でも一部でも)は、どうぞお知らせください、あなたの国での参加者と関係をとることができます。

詳しくはこちらを[クリック](#)ください。